OISO MUNICIPAL MUSEUM

Report リポート

大磯町郷土資料館だより
2010・3・30
30

目次

2 伊藤博文没後100年記念事業をふりかえって
4 2009　アカウミガメ産卵・孵化の記録
6 約20年ぶりに本町で確認されたアナグマ
7 いきものたんけん隊の学習発表
8 平成21年度博物館実習生による「旧吉田茂邸～終の住処を思う～」展／資料の寄贈

脱出直後のアカウミガメの子ガメ（2009. 8. 9撮影）

伊藤博文没後 100 年記念事業をふりかえって

平成 21 年（2009）、初代内閣総理大臣を務めた伊藤博文が明治 42 年（1909）に亡くなってから、ちょうど 100 年を迎えました。当館では伊藤博文没後 100 年記念事業として、平成 21 年 10 月 24 日（土）から 12 月 6 日（日）まで記念展示を開催したほか、記念講演会、史跡ツアー、上映会、ミュージアムトークなど、さまざまな関連事業を展開しました。

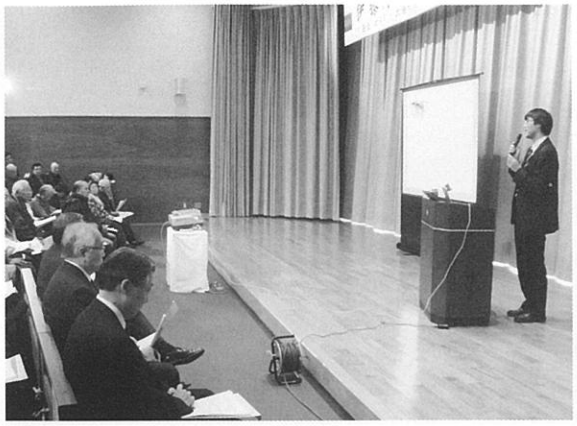
伊藤博文（1841 － 1909）は、天保 12 年（1841）に周防国熊毛郡束荷村（現・山口県光市）の農家・林家の長男として生まれました。14 歳のときに一家をあげて萩藩の水井武兵衛（伊藤直右衛門）家に入り伊藤姓を名乗ります。その後、松下村塾に入門して吉田松陰の教えを受け、桂小五郎、高杉晋作、久坂玄瑞らとともに攘夷論者として活動しました。しかし、文久 3 年（1863）、英国への密留学において英国の先進文化と圧倒的な国力を目の当りにし、攘夷論に限界を感じて開国論に転じます。その後、攘夷論者の刺客に狙われながらも討幕運動に身を捧げ、明治維新へ向けての大きな原動力として活躍しました。明治 4 年（1871）には、開国以来の不平等条約改正や欧米の国家制度・文化視察を目的とした岩倉使節団の副使として、岩倉具視、木戸孝允、大久保利通らとともに欧米各国を巡歴し、近代化へと大きく舵をとることになります。やがて、伊藤は明治政府の中枢として大日本帝国憲法の発布や内閣制度の創設にかかわり、初代内閣総理大臣を務めるなど、日本の近代国家体制を確立した功労者としての活躍は周知の通りです。

さて、伊藤は、政界の第一線で活躍する一方で、大磯町ともたいへん深くかかわっています。大磯とのかかわりは、持病に悩まされていた梅子夫人の静養先として大磯を選んだことに始まります。当時、大磯町は海水浴場の開設にともない、転地療養の地として広く知られるようなっていました。梅子夫人は当時大磯駅裏にあった大旅館・招仙閣で 2 年近く静養することになります。やがて梅子夫人の病状が快方へ向かうと、小田原にあった別邸・滄浪閣を明治 29 年（1896）に大磯へ移しました。さらに翌年には本籍も大磯へ移し、文字通り大磯町民になりました。本籍を移す際、伊藤自らが町役場へ赴き、大磯のために協力を惜しまない旨を申し出たといいます。その言葉どおり、町では折に触れてさまざまな援助を仰ぎました。また、伊藤は激務の合い間を見つけては、大磯町民と積極的にかかわりをもち、気さくな一面を示すさまざまな逸話を残しています。そして、明治 42 年（1909）に韓国で狙撃されて亡くなるまで大磯町民であり続けました。

記念展示

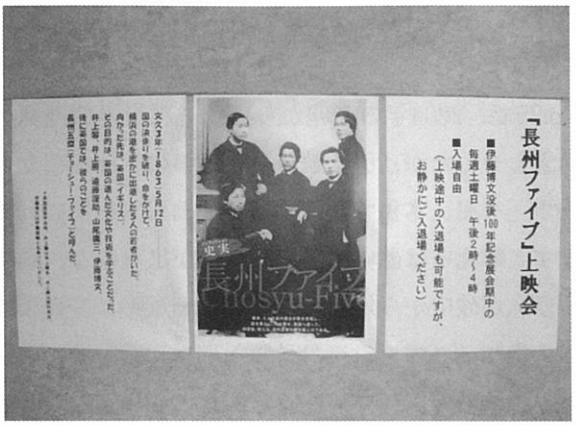
伊藤没後も大磯町では節目ごとにさまざまな形で追悼し、顕彰してきました。1 周忌の明治 43 年（1910）には大磯町西小磯の白岩神社境内に「藤公神社」が祀られ、大正 15 年（1926）には同じ境内に「藤公碑」が建てられます。さらに昭和 16 年（1941）には滄浪閣の地に「伊藤公滄浪閣之旧蹟碑」がいずれも有志らによって建てられるなど、その後も町民に愛され続けてきました。

また、没後 50 年にあたる昭和 34 年（1959）には、町主催で記念展示が開催されました。当時は、まだ伊藤を直接知っている人も存命で、伊藤の記憶はとても鮮明に語られていたようです。大磯町役場旧庁舎で開催された記念展示では、大磯町内外から 61 品目 84 点の資料が集められ、観覧者で賑わいをみせました。しかし、一方では開催にあたって少なからず懸念もあったといいます。それは、伊藤の社会的・歴史的評価、とりわけ海外での伊藤に対する「評価」を意識してのことだったようです。特に初代韓国統監であった伊藤に対し、韓国併合の象徴として韓国国内で強い批判を浴びていたという事実が大磯においても認識されていたということなのでしょう。その後、町主催行事のなかで伊藤を真正面から取り上げることはほとんどなく、長い年月が経過しました。



記念講演会（海の見えるホール）

史跡ツアー参加者（品川歴史博物館にて）



上映会告知

しかし、状況に変化が見えてきました。これまで日本と韓国における伊藤の評価を含めた歴史認識には大きな隔たりがありましたが、近年になって日韓の相互理解を深めるとともに、伊藤を再評価しようという気運が生まれています。そこで、単に伊藤の業績を顕彰するだけでなく、国際的な視野を持ち、さまざまな意見に耳を傾けながらあらためて伊藤の為し得た多くの業績を検証していくことを目的に、町として没後100年記念事業を企画することになりました。そして、日韓相互理解を進める活動の中で、中心的な役割を担っておられる京都大学の伊藤之雄氏と奈良岡聰智氏の２氏を招いて記念講演会を開催することを大きなバックボーンとして事業展開をはかりました。

記念展示の企画にあたっては、昭和34年の没後50年展示の際に個人から借用展示された資料が骨子になると思われました。しかし、当時作られた資料目録の所在確認はなかなか進みませんでした。既に50年を経過しており、関係者の多くが大磯の地を離れ、また、世代交代が進み、資料が見つからなかったり、資料の存在さえご存知ない方もおられるような状況でした。それでも地道に調査を進めたことで、結果的には没後50年展示とは比較にならないほど多方面からの情報や資料のご協力をいただくことができました。そして、「伊藤博文の生涯」「滄浪閣の時代」「顕彰の時代」の３つの大きなテーマを設けて展示を構成しました。また、展示にあわせて図録も刊行することができました。ささやかな図録ですが、少なくとも関連資料の目録的な役割は果たせたのではないかと考えています。

今回の事業では全体を通して予想以上の反響がありました。記念展示への入館者や各行事への参加者も当初の予想を上回る盛況さでした。記念講演会では、大磯の別荘文化を象徴する旧岩崎邸内の施設（聖ステパノ学園講堂「海の見えるホール」）での開催が実現し、伊藤博文の墓所（品川区）を巡る史跡ツアーも予定の募集人数を超える盛況ぶりでした。そして、驚いたことにいずれも県外を含む大磯町外からの参加者が半数以上を占めるなど、今までにない参加者層が得られたことも特徴です。このことは、大磯町の町づくりや当館の今後の活動にとって、明治という時代が間違いなくひとつの大きな核になることを証明してくれたといって良いでしょう。また、大磯町として独自の伊藤の評価を持つことも必要ではないかと強く感じました。

いずれにしても、今後の博物館活動はもちろん、大磯町の観光行政を考える上でもたいへん有意義な事業であったといえます。

最後になりましたが、本展示に際してご協力を賜わりました伊藤家の皆様をはじめ、関係者、関係機関に対しまして、あらためて厚く御礼申し上げます。

（当館学芸員／佐川和裕）

2009 アカウミガメ産卵・孵化の記録

はじめに

昨年の夏、大磯町の海岸でウミガメの産卵が確認されました。近隣の市町では近年、アカウミガメの産卵確認が相次いで報告されましたが、本町では2004年以来、５年ぶりのことです。最近の10年間では2002年、2004年、そして2009年が３回目になります。2002年の産卵確認の際は江ノ島水族館に保護を依頼し、人工孵化によって子ガメを海に帰しましたが、2004年と今回は自然孵化を見守り、幸いにも子ガメが相模湾の大海へと旅立つ様子を観察することができました。大磯町郷土資料館だよりNo.25で、2004年の産卵から孵化・脱出の確認状況をお伝えしましたが、引き続き、2009年の状況を紹介いたします。なお、本稿では孵化と脱出の用語を使い分けています。孵化とは砂中で卵から幼体が出ること、脱出とは子ガメが砂中から外界に出ることを意味しています。

卵の確認

ウミガメ上陸の連絡は、５月25日午後２時頃、大磯町環境経済課からいただきました。私は野外観察の一環で、午前９時から大磯町照ヶ崎海岸で、潮汐の移り変わりを記録していました。上陸の確認情報とは、前日の24日、町ぐるみ美化キャンペーンで海岸清掃のため、大磯町西小磯 旧滄浪閣下の海岸を往来された方々が、ウミガメが上陸した足跡を目撃されたというものでした。折角いただいた情報でしたが、午後４時までは作業の計画上、現地には赴けず、同刻を過ぎてからようやく現地に向かうことができました。ウミガメの足跡は人目につきにくいように消しておいたとのことでしたが、これまで

ウミガメ産卵場所付近の様子

確認したウミガメの卵

に４度、ウミガメの足跡を目撃したこともあって、段丘の方面に並行して進んでいる２本の曲線をもとに産卵場所が分かりました。産卵場所は段丘のおちこんでいる場所のすぐ側にあり、足跡の状況から親ガメは上れる所まで、上って来たという印象でした。早速に往きの足跡、帰りの足跡が交わっている場所を掘ってみました。卵があると思われる地中の深さですが、2002年の確認時は卵の深さは28～50cm、2004年の確認時は32～53cmでしたので、30cmくらいの深さで掘っていくと何らかの感触が得られると思い、直径１ｍの円状に掘下げていきました。しばらく作業を行ないましたが、結局、卵を見つけられず、上陸しただけで卵を産まなかったのではと判断しました。

その後も産卵のことが気になり、卵を産まなかった時の足跡の状況を考えました。これまで、産卵しなかった時の状況は、上陸したが、人が大勢集まってきたため、途中で方向転換し、穴を掘らずに帰海したケース、また上陸し穴を掘ったが、大きな石や生活ゴミがあり、数箇所を掘った後、あきらめて帰海したケースがあります。産まなかったときの上陸の痕跡として、穴を掘らない、産卵場所への直線的な移動ではなく、蛇行しているという特徴が見られており、このたびの状況でいうと往路、復路が直線的であり、産んでいる可能性が高いと思うようになりました。翌々日の５月27日、再び確認調査を行なうことにしました。前回掘った円を拡張するように掘っていったところ、当初、産卵場所と考えた位置から南東に２ｍ近く離れた所で卵を確認することができました。その後、写真撮影や最上部の卵の位置、海岸線からの距離と産卵場所の標高を計測しました。最上部の卵の

位置は28cm。海岸線から産卵巣までの距離と高さについては、距離が約70m。高さは海岸線より７m高い位置にありました。海岸は人の往来が頻繁にあるものの、産卵巣は傾斜面地にあり、人の足跡が全く無いこと、また、先ほどの計測の結果、海岸線から十分に離れ、潮をかぶる危険性が少ないことなどから、前回と同様に自然孵化を見守ることにしました。

なお、後日、毎日海岸を散策されている方から情報をいただき、ウミガメ上陸の痕跡は町ぐるみ美化キャンペーンの前日の５月23日からあったことが分かりました。

轍の中で死んでいた子ガメ

孵化・脱出

過去２回の産卵・孵化確認で、アカウミガメは通常、60日～70日で孵化・脱出することを学びました。孵化までにかかる時間は地温と密接な関係があり、地温が30℃前後の日が続けば、孵化が早まるといわれています。昨夏は長雨の影響で地温が低く、孵化に時間が掛かることが想定されたこと、また、文献で孵化状況を調べたところ、本州における５月下旬の産卵では、孵化は８月にずれ込む可能性が高いことから、孵化確認の巡視調査を７月末から行なうことにしました。

７月29日（産卵から67日目）から始め、11日目の８月９日（産卵から78日目）、午後４時15分頃到着すると既に子ガメが脱出した足跡がありました。予想外の事態に驚き、産卵巣の砂の上部を触ってみるとまだ数匹のウミガメがいることが分かりました。その後、しばらく状況を観察すると、１個体が午後４時40 分すぎに顔を出し、まもなく脱出。ウミガメが海へ到着したことを見届けた後で、再び産卵巣の所に戻るともう１個体のアカウミガメが頭を出していることに気が付きました。その

脱出直後のアカウミガメ

後、頭だけを出した状態がしばらく続いたため、産卵巣周辺を散策してみると砂上に３個体のアカウミガメが轍の中で、死んでいるのを見つけました。アカウミガメは日中、気温が高い時間帯に脱出をすると、海へ辿りつく前に体力を消耗して、死んでしまうことがあるようで、今回も最初の脱出は日中ではなかったかと考えています。その後、郷土資料館職員に連絡を取り、職員全員で午後10時20分まで、監視を行ない、計９個体の脱出を見届けることができました。

翌日は、台風接近のため、海は荒れていました。波に卵殻を持っていかれないように、孵化調査を行ないました。2004年の孵化調査は、脱出の翌日に実施し、砂中に残存している子ガメは確認できませんでした。しかし、今回は状況が異なり、10個体以上の子ガメがまだ残っていました。仕方なく、子ガメを埋め戻し、脱出を待つことにしました。翌11日、今回の調査で、情報提供等でお世話になった新江ノ島水族館 小谷野有加さん、そして地元の獣医師である中山和也さんに状況を説明したところ、一度、産卵巣の砂を取り除き、人の手で埋め戻すと脱出できなくなる可能性があることをうかがいました。心配になり、午後９時から資料館職員一同で、再度、孵化調査と砂の入替えを行ないました。その際、砂中にはまだ29個体のウミガメと孵化前の卵が数個残っていました。孵化したウミガメのうち28個体は卵黄が見られず、いつでも脱出できる状態で、１個体はまだ卵黄が残る脱出にはまだ時間がかかる状態でした。午後10時まで作業を続け、すべて砂中に戻す予定でしたが、７個体の子ガメが活性化し、海へ向かっていきました。

それからは、表１のように８月17日まで、毎日、数

月日	曜日	産卵後の経過日数	脱出痕の数	脱出個体の足跡の数	地上での衰弱死個体数
8月9日	日	78日目	5ヵ所	数十個体	3個体
8月10日	月	79日目	(無)	(無)	(無)
8月11日	火	80日目	(無)	(無)	(無)
8月12日	水	81日目	3カ所	20数個体	(無)
8月13日	木	82日目	4ヵ所	5個体	2個体
8月14日	金	83日目	2カ所	3個体	(無)
8月15日	土	84日目	2ヶ所	8個体	(無)
8月16日	日	85日目	1ヵ所	4個体	(無)
8月17日	月	86日目	1ヵ所	3個体	(無)
8月18日	火	87日目	(無)	(無)	(無)
8月19日	水	88日目	1ヵ所	1個体	(無)

表1．8月9日から19日までの脱出の確認状況

脱出痕とは、産卵巣上で子ガメが脱出した穴の数を記しています。

匹ずつの脱出が確認できました。8月19日、子ガメの脱出が落ち着いたと判断し、孵化調査を行ないました。卵の個数は119個、孵化したウミガメは97個体で、孵化率は81.5%でした。前回、2004年の時は、卵の個数109個、孵化個体数60個体、孵化率55.0%でしたので、孵化率はかなり良好であったといえます。

子ガメが大海へと旅立つ姿は何度見ても感動的です。毎回のことながら、その状況は郷土資料館の関係者しか立ち会えず、今後、多くの方と安全に見守れる方法を模索していきたいと考えています。

最後に本調査にご協力いただきました皆様には厚く御礼申し上げます。

（当館学芸員／北水慶一）

約20年ぶりに本町で確認されたアナグマ

近年、移入種が分布を広げ、本来その地域に生息する固有種が生活の場所を失い、減少したり、見かけなくなったりするなどの問題が生じています。大磯町でも、近年、全く見られなくなった動物が数種類いますが、そのひとつにアナグマがあげられます。アナグマとはイタチ科の哺乳動物で、爪が長く、目の周りにこげ茶色の縦縞があるのが特徴です。雑食性で昆虫やミミズ、木の実などを好みます。『大磯町史9 別編 自然 データ集』によると、アナグマの目撃情報は1990年頃に大磯町生沢において、民家の側で穴を掘っている姿が目撃されたのが最後です。それから20年近く全く目撃情報が無かったのですが、2008年10月と2009年5月の2回確認されたので、事例を紹介します。

アナグマの確認地点（大磯町発行「大磯町全図（1万分の1）」）を縮小して使用）

2009年に釜口古墳付近で捕獲されたアナグマ

○2008年10月確認のアナグマ

2008年10月1日頃、獣医師である中山和也氏が大磯町西小磯 磯の池付近で、傷病のアナグマを保護されました。食中毒で衰弱していましたが、1週間ほどで容態が回復し、10月8日に野放されたそうです。

○2009年5月確認のアナグマ

2009年5月16日、大磯町環境経済課が設置したイノシシ捕獲用の檻にアナグマが掛かりました。場所は大磯町大磯 釜口古墳近くの山中です。頭部に皮膚病が確認されましたが、外傷はなく、旺盛に檻の中を徘徊していました。翌日、野放されたそうです。

※2体とも体長を計測しておらず、また標識等も付けていないため、同一個体かどうか定かではありません。

（当館学芸員／北水慶一）

いきものたんけん隊の学習発表

わたくしたちの身近な場所では、様々な生き物が生活しています。実に多数の生き物がいるのですが、以外にもそれぞれの生き物がどんな生活をしているのか知らないことが多いです。生き物や自然の不思議に興味をもった『いきものたんけん隊』の仲間が、アブラゼミの羽化と大磯町で見られる化石について調べてくれました。発表者は平塚市在住の杉﨑亮隊員（小学２年生）です。

アブラゼミの羽化

○ かんさつした日　2009年8月7日（金）

○ 見つけたばしょ　（平塚市）五領ヶ台公園

① 午後 10:57　② 午後 11:05　③ 午後 11:13　④ 午後 11:17

⑤ 午後 11:20　⑥ 午後 11:23　⑦ 午後 11:29　⑧ 午後 11:37

⑨ 午後 11:42　⑩ 午後 11:44　⑪ 午後 11:47　⑫ 午後 11:50

化石の標本作り

大磯町西小磯の海岸で化石をとりました。とった化石を大磯町の郷土資料館でしらべました。ここにある化石は600～500万年前の化石だということです。サメの歯の化石は、めずらしいものだと教えてくれました。

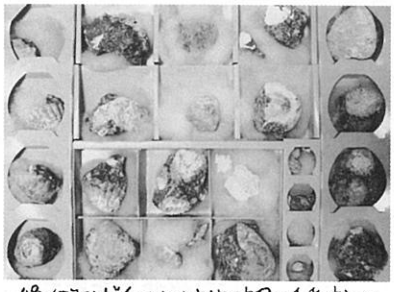
① とった日　2009年8月27日（木）

② とった場所

大磯町西小磯の海岸

③ 化石をとる時に使った道具

④ 化石の標本



パンダニガイ、スウチキサゴの一種など

③ まとめ、かんそう

固い岩をけずって、ほりだすので、化石がわれちゃって、とるのがむずかしかったです。でも、本物の化石が手に入ってうれしかったです。次ぎもがんばってとりたいです。

※ 化石の種名は『平塚市博物館（1984）「神奈川の化石－よみがえったナウマン象－」』を参考にしています。

※『いきものたんけん隊』とは、架空のグループです。

平成21年度博物館実習生による
「旧吉田茂邸～終の住処を思う～」展

大磯町郷土資料館では、毎年、学芸員資格取得のための実習生を受け入れています。今年度は、５大学５名の実習生が参加をしました。例年、約２週間の実習を行ない、まず前半は、資料の取り扱いについての技術を学びます。そして後半には展示替え実習を行ないます。展示替え実習は、実習生が展示テーマや展示物を選び、列品やリーフレットの編集を行なうのですが、今年度は、旧吉田茂邸を取り上げた展示テーマにしました。吉田茂、同氏の縁の品や旧吉田邸のジオラマを展示しています。旧吉田邸を俯瞰するジオラマは敷地内の構造物を分かりやすく示しています。

実習生が制作した展示を是非ご覧下さい。

【平成21年度博物館実習生】

資料の寄贈（平成20年11月～平成21年12月）

地　区	受入先	資料名
高　麗	曽根田純一郎 氏	衣　服
大　磯	石井三郎 氏	左義長の模型
	木村純子 氏	昆虫生態写真 他
	関野菊枝 氏	衣　服
	野嶋謙一 氏	皇室肖像画
	福田　適 氏	昆虫標本
東小磯	新見由美子 氏	カイセキ膳 他
西小磯	小見　巌 氏	風景写真 他
	高橋静男 氏	テンビンバカリ 他
	土屋フサ 氏	フクサ
国府本郷	近藤利子 氏	着　物
	原田朝和 氏	車井戸のクルマ 他
国府本郷	紅谷寅治 氏	柱時計
国府新宿	加藤廣重 氏	トウミ 他
生　沢	佐々木茂 氏	陶製手榴弾
虫　窪	斎藤金次郎 氏 斎藤チヨ 氏	膳・椀 他
二宮町	西山敏夫 氏	巾着網設計図 他
平塚市	伊藤貞夫 氏	カガミダイ（生魚）
	丸若和栄 氏	扁　額
山北町	長野達夫 氏	ホンドキツネ（剥製）
横浜市	田川順三 氏	衣服 他
東京都内	倉田静江 氏	耐火煉瓦・赤煉瓦
	森　龍朗 氏	原安民（昔人）資料

ご協力ありがとうございました。

編集後記

現在、大磯町郷土資料館では春季企画展「研師 人間国宝 永山光幹」を開催し、賑わいをみせています。

本年度を振り返れば、夏季企画展で植物研究家の宮代周輔氏、秋に伊藤博文公、そして今回の永山光幹氏と大磯町ゆかりの人物にスポットをあてた展示が続きました。昨年度、開館20周年記念事業を展開した直後の１年目でしたが、展示で紹介したそれぞれの方の人物像を通して、大磯町の地域的な特徴を感じていただけるテーマ取りができたのではないかと考えています。今後も小さい博物館ではありますが、大磯らしさを感じていただける事業を実施していきたいと考えています。ご期待ください。（北水）

Report －大磯町郷土資料館だより－ No.30
平成22(2010)年３月30日発行

編集・発行　大磯町郷土資料館
〒255-0005　神奈川県大磯町西小磯446-1
TEL.0463(61)4700／FAX.0463(61)4660